

という値が得られた。これは、銀河面の巨大分子雲について得られた値と比べて、有意に低い値である。

第二に、今回の観測によって、これまでの観測の中で最も低い表面輝度の値を得ることができた。すなわち、

$$\lambda I_{\lambda}(154\mu\text{m}) = (3.64 \pm 0.85) \times 10^{-12} [\text{W cm}^{-2} \text{ sr}^{-1}]$$

$$\lambda I_{\lambda}(186\mu\text{m}) = (3.16 \pm 0.69) \times 10^{-12} [\text{W cm}^{-2} \text{ sr}^{-1}]$$

(20%の系統誤差を含む)

これには、高性能な観測装置に加えて、Lockman Holeと呼ばれる全天で最も中性水素の柱密度が低い領域($l \sim 151^\circ, b \sim 51^\circ$)を観測したこと、および波長を200 μm まで延ばすことで太陽系に付随したダストからの熱放射の寄与を低く抑えられたことが重要な要因となっている。この観測値はそれ自身十分低い値であり、現時点で最も信頼できる宇宙背景放射の上限値を与えている。この値を赤外銀河の形成と進化のモデルから予想される背景放射強度と比較すると、例えば電波銀河などと同様な個数密度の進化を仮定した場合、赤外銀河の形成は赤方変移 z が1.5以下であることを必要とする。これは、前景放射成分の寄与などを考慮すると、赤外銀河の形成に関わる何らかのイベントが、赤方変移 z の値が1前後の時代に起こったことを示唆している。